

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】北野尚美

【所属】(助成決定時)大阪大学大学院人間科学研究科

【研究題目】子どもに対する体罰の種類と頻度に関するアジア5か国共同研究

【研究の目的】

表題は本研究を含めた研究の全体構想であり、本研究は、国際比較研究を可能とする目的で必要である等価な質問票の開発を目的とした。本研究は、アジアの国々で欧米諸国に倣って児童虐待防止の方策を進めていくことには限界があると予測して計画した。アジアのそれぞれの地域社会の生活と伝統的な習慣や知恵など子育てに関わる文化を踏まえた上で、子どもの人権擁護というグローバルな視点に個別性を加味した児童虐待防止の対応、方策をオーダーメイドで発展させていくために役立つ調査研究環境の整備が必要である。また、日本で外国人登録者数と国際結婚カップルは増加傾向にあり、出生数の減少のなかで、2007年には日本で出生した新生児のうち父母ともに外国人あるいは父母のどちらかが外国人である子どもの割合は3.41%に上っている。この点からも複数の言語版と比較可能な日本語版の質問票が望まれている。

【研究の内容・方法】

International Society of Prevention for Child Abuse and Neglect (ISPCAN)とUNICEFで共同開発された原版が英語の質問票 The ISPCAN Child Abuse Screening Tool (ICAST)について、日本版の開発研究を行った。日本版の開発に先だって関係者から翻訳許可を得た。ICASTには4種類あり、Children's Version(CH:家庭内のしつけや身体罰の経験についての質問票、11~18歳の子どもを対象にグループ面接など秘密性と匿名性が担保された条件下で、熟練した面接者によって、親の許可のもとに行う)52項目、Children's Institutional Version(CI:学校やコミュニティ、あるいは労働中に受けた暴力と劣悪な待遇についての質問票、11~18歳の子どもを対象に秘密性が担保された条件下で熟練した面接者によって、親の許可のもとに行う)58項目、for young adults(R: Retrospective: 18歳までに受けた暴力や嫌と感じたり不安になったりしたことについての質問票:無記名自記式、家族や知り合いや権威から秘密性が担保された条件下で行う)26項目、Parent Questionnaire(親用:家庭内で子どもに対して用いたしつけ、罰と暴力についての質問票)45項目である。それぞれにマニュアルが作成あり、これら全てを研究対象とした。

日本版作成の手順は、尺度の日本版開発研究に関する先行研究調査を行った結果から、本研究ではAcquadro et al(1997)の手順を参考に進めた。専門の異なる複数の日本人研究者がチームで原版の日本語訳を作成した(第1段階)。専攻を異にする複数人の大学院生と、子育て経験を持つあるいは子ども虐待研究を行っている研究職、看護師、保健師、子ども虐待に職場で関わっている心理職、福祉職、医師の男女から、調査質問項目の内容と日本語について自由な意見の聞き取りを個別に行った(第2段階)。それら意見を参考に、質問文・内容、回答項目について見直して日本語版案を作成した(第3段階)。英語原版をこれまでに見たり読んだりしていない日本人で英語が堪能な研究者らと、日本在住歴が長く母国語が英語で日本語が堪能な外国人らからなる研究協力者チームで、日本語版案を英語にバック・トランスレートした(第4段階)。この過程では日本語版案を作成した日本人研究者チームとバック・トランスレート担当チームは接触せず、解釈が複数となる、単語や文脈が曖昧などバック・トランスレートの問題点を日本語で書き込んで注意喚起を記しながら作業を進めた。4種類全てのバック・トランスレート終了後に、日本語版案作成チームがコメントの内容確認をして、一部修正した日本語原版を完成させた。修正したバック・トランスレート原稿を用いて、ICAST 英語原版と日本語原案の比較検討が英語原版開発者らによってなされている。

なお、調査票の運用に関する英文マニュアルに関しては、その性質上、日英の翻訳専門家集団に依頼して日本語に翻訳することで、日本語版マニュアルとした。

【結論・考察】

本研究では多職種多言語の学際チームによって ICAST 日本版開発研究を行った。国際比較研究で用いる異なる言語で等価な尺度の開発には、翻訳固有の問題と妥当性など尺度評価の問題の解決が必要で、本研究では前者について先行研究調査に基づいた手法を用いて研究を行った。ICAST の質問項目は具体的で、平手打ちする、こぶしで殴る、かみつく、蹴る、硬いもので叩く、外に立たせておく、ナイフでおどすなどだが、銃でおどすは日本での調査に合わなかった。子どもに対する調査票に、性的虐待に関わる質問内容が比較的具体的な表現で複数項目あることについて、日本では性的虐待の調査や対応は研究と実践のいずれでも手探り段階であることから日本語版作成の段階で単語の選択に活発な議論があり、日本人研究チームで使用困難感が高かった。第2段階の聞き取りでは、質問項目全般に直接的な単語や内容で、性的虐待も含まれることに一部が驚き、年長者や男性でより抵抗感が強い傾向があった。日本版原案は翻訳固有の問題はほぼ解決できていると考える。一方で、使用可能性については、特に性的虐待に関わる質問項目の使用困難への危惧があり、現段階では日本において尺度評価を目的とした調査は現実的でないと考える。被虐待症例への面接で用いる構造化質問票として使用可能性を考え、児童相談所等と検討を進めている。